

箱の賃賃料は三週間で約二百元(三千円)だそうだ。

〈用具及び参考文献〉

養蜂会議カバン

中国製キルト地のロングコート(軍大衣)最近見かけないが列車内で寝たり隙間風の入る待合室や屋台での食事にはうってつけである。

『精選英漢漢英詞典』= Commercial Press/オックスフォード大学出版及び拡大鏡

『中国地図冊』

ノート

蜂よけ面布(使用せず)

北京養蜂会議のアドレス帳

中国養蜂学会、中国農業科学院蜜蜂研究所、黒竜江省牡丹江農業科学研究所共著『中国蜜粉源植物及其利用』農業出版社、一九九三年

徐方林『中国蜜粉源植物』黒竜江科学技術出版社 一九九二年

Ted Hooper, *Guide to Bees and Honey*, Third edition, Blandford, 1911.

Eva Crane, *Bees and Beekeeping*.

Science, Practice, and World Resources, Heinemann Newses, 1990.

林弥栄『日本の樹木』山と溪谷社、一九九六年

林弥栄『日本の樹木』山と溪谷社、一九九六年

〈協力いただいた方々〉

陳尚発 何宋元・王剛平 徐全義・張玉珍・徐政 黄本志 吳傑

(愛知大学法学部教授)

(邦訳 北岡真理)

方克立先生と中国現代新儒学の研究

劉迪

その道に明るい人なら誰でも知っていることだが、哲学研究の領域で、方克立先生は早くに「正道の外へ出た」。一九六三年、中国の権威ある哲学雑誌『哲学研究』第四期に哲学界の大学者と対話する一編の文章が載った。題名を「孔子の『仁』の研究方法について——馮友蘭先生と討議する」という論文で、その筆者がほかならぬ方克立先生であった。この文章において、世の中に出たばかり、年をとる言えばわずか二十五歳の先生は中国哲学界の大儒者馮友蘭に向かつて戦いを挑んだ。馮友蘭が孔子の仁学研究で提出した思想の「普遍的形式」の解釈、及びその適用に対して疑義を提出したのである。先生は哲学史の研究においては歴史的分析と階級的分析の方法をしつかり守らなければならないと主張した。

方克立先生は一九三八年湖南省の湘潭県に生まれた。一九六二年中国人民大学哲学系を卒業し、同年そのまま学校に留まって教員になった。一九七三年南開大学に移り、一九八四年には教授の任についた。一九九四年中国社会科学院に転任して大学院の院長を担当することになった。

六〇年代の中頃から中国の哲学界は度重なる嵐に見舞われたが、方克立先生はその鋭い哲学的洞察によって時代の最先端に立ちつづけた。八〇年代に入って、新儒学が中国に伝えられ、方先生はこれに対して真剣に取り組む必要を感じて一連の論文を書いた。例えば「現代の新儒学研究を重視しなければならぬ」、「現代の新儒学と中国の現代化」、「現代新儒学研究の発展過程」などである。こうした諸論文において先生は、現代の新儒学は現代中国の歴史的背景のもとで必然的に生み出された思想

文化現象であって、これに対して具体的な分析を行なうべきであり、盲目的に有り難がってはならず、またその貢献と歴史的意思を抹殺すべきでもない、ということに指摘した。

先生の提唱の下に、中国に「現代の新儒学思潮研究」を課題とする全国的なグループができた。先生が責任を負って具体的に活動を組織して数年が過ぎ、そのグループは立派な研究成果をあげた。一九八六年以後中国の大陸では全部で六百余りの新儒学の研究に関する論文が発表されたが、その半分以上は同グループのメンバーが書いたものである。この研究グループは、そのほかにも大量の新儒学研究の著作や論文の執筆、及び基礎資料の編集を行なって、世の圧倒的な好評を博した。例えば「現代新儒家学案」（上、中、下）、「現代新儒学輯要叢書」一五巻、「現代新儒学研究叢書」二十余冊、「現代

新儒学研究論集」一、二集などである。

新儒学の領域を開拓し耕してきた方先生の仕事は国内外の学者の間で公認されるに到っている。たとえばアメリカの学者杜維明は多くの文章の中で、余英時はヴォイス・オブ・アメリカのアジア論壇という番組の中で、いずれも中国新儒学研究の代表的な人物として方先生の名を挙げている。

方先生は官途に上ることに心を取られるような人ではないが、そういつた方面においても追い風を受けてきたように見える。研究や教育の仕事のほかにも、先生は行政や社会の場面でも多くの重大な任務を担当してきた。先生のお話によると、中国社会科学院の大学院は人文社会科学研究所の高レベルの人材を養成する学府であるが、ほかの高等教育機関と異なり、同大学院は国家から教育専用の予算措置を受けておらず、大学院教育

活動の経費は主として中国社会科学院の科学研究費の一部を割いてまかなわれているので、規模の面から言うとはかの高等教育機関とは比べものにならない。しかし、社会科学院大学院のよい点は、「所をおさえて系を設ける」ことにある、つまり一つ一つの系はすべて中国社会科学院の関係ある研究所に対応しているのであり、このことは中国社会科学院の優越性を發揮し、国家のために時代が要求する高度な専門研究のための一群の人材を養成するのに有利である。

先生は誇らしげにこう紹介された。全国の優秀な博士論文・修士論文の文庫の中で、社会科学院大学院卒業生の書いたものがそのもつとも多くを占めている。同大学院が開設以来ようやく二十年が経ったばかりであり、規模がほかの重点高等教育機関にはるかに及ばないことを思えば、このことは確かに留意するに値する。

先生の説明によれば、同大学院の特に優れた点は、ほとんどすべての指導教官がその研究領域の有名な学者でありリーダーであることであり、彼らは学生に機会を与えるような心を配り、全国的な重要な項目である科学研究活動に参加させることに他ならない。その研究項目というのは経済や法学など現実と密接な関係のある学科であつて、指導教官は学生に直接社会調査などを行なわせ、ある種の政策の策定やその裏付けの作業に関わらせたり、またある種の立法の準備作業に関与させたりするのである。

先生は言う。社会科学院大学院は中国の改革において重要な役割を果たしたが、それ自体が改革の産物でありまた目撃証人でもあると。

(早稲田大学法学研究科博士過程)
(邦訳 山田克利)

